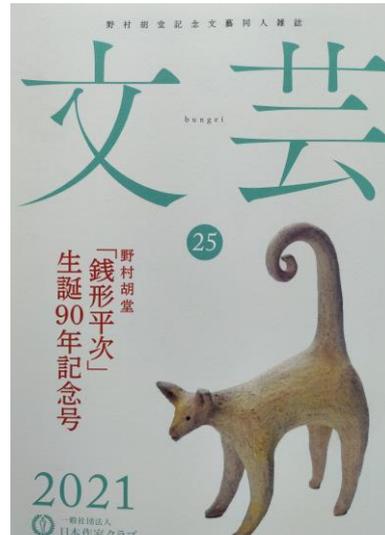


その 47

舞台から降りたい



「舞台の板の上に、お芝居の神さまが舞い降りてくる」とか、「舞台の奈落には、魔物が隠れ棲んでいる」という、まるで芝居のセリフのような話を演劇関係者から聞いたことがある。

どちらもその通りなのだろう。演劇の世界には全くの門外漢が、初めて音楽朗読劇の制作に取り組み思いがけない成功を収めた後、奈落に転がり墜ちるが、その後……という、今になって振りかえてみると、まるで3幕ものの舞台劇のような波乱万丈の軌跡をたどった、言わば今回はその第3幕だが、新たに3幕ものの物語としてまとめるために、まずは多少の繰り返しをお許しいただき、これまでの2幕を振りかえてみよう。

第1幕

2018年も終わろうという頃、突然旧知の友人で文芸誌『文芸』の藤橋編集人から電話があり、いきなり聞かれた。「ドキュメンタリーのプロデューサーが、柄にもなく万葉集に憑りつかれているという噂だけど、一体何があったの？」。

そこで足を骨折して入院中の編集長を見舞い方々訪ねて、格好よく「万葉集は古代のドキュメンタリーだからさ」など等答えたところ、数日後箇条書きで10項目ほど質問が送られてきた。「面白くなりそうだから、これをもとに原稿にまとめろ」というご下命である。

編集長の読みは見事に当たっていた。確かにその後に起きた展開が思いもかけぬ面白さだったから。

まず、第1幕が2019年2月発行の『文芸』23号の「万葉シュウほど素敵なショウはない」だった。

自慢ではないが、「万葉集」なるお堅い本など、それまで一度として読んだことがなかった私が、何の因果か一度は断ったミニ番組シリーズ「日めくり万葉集」の制作を引き受ける羽目になった。ところが、万葉集に初対面した途端、彼女に一目惚れ、老いらくの恋に落ちてしまった。そこで編集長への最初の質問にはこう答えた。「万葉集に憑りつかれているという噂は本人が流したものだから、間違いない。だけど、憑りつかれているので

はなく、私の方が万葉集に憑りついているのよ」。

「日めくり万葉集」シリーズの放送が終わってからも、魔性の女から離れられなくなったかの如く（残念ながら、老いらくの恋も、魔性の女も、女性に対してはそのような経験はない）、不遜にも「万葉集宣伝係」を自称して、ささやかながら活動を続け、拳句の果ては無謀にも万葉集の舞台化にチャレンジしてしまったのである。2013年と14年に万葉故地の高岡市で、私の初めての脚本で上演した音楽朗読劇「万葉ファンタジスタ大伴家持」である。主演の大伴家持役はいずれも俳優石黒賢さん、演出は13年がたまたま定年で富山に帰っていた元NHKのドラマ部プロデューサーに頼み、14年は舞台演出家の大杉良氏に依頼、ともに成功裡に終えることができた。そして、3回目が2019年3月の鳥取公演だった。

編集長から電話をもらったのは、その鳥取公演の脚本を書き上げた頃で、その関連で、もう1つ聞かれた。

「万葉集については分かったけど、ドキュメンタリー畑のプロデューサーがなぜ舞台なの?」。問われてみて、自分も初めて思い出した。そう言えば、自分はそもそもドラマや舞台をやりたくて、NHKに入ったんだ。ところが希望叶わず、ついにドラマ部に行くことができず、その代わりにドキュメンタリー畑を志してきた。

そして、もう1つ思い出した。そもそもNHKに入ってドラマをやりたいと思うようになったきっかけは、小学生の時の児童劇団体験だった。七夕空襲とロマンチックに呼ばれた空襲で焼け野原になった甲府の街に、子どもたちを元気づけようとしてきた児童劇団「童連」に入ったのだ。それ以来の舞台、つまり、70年目にして夢が叶いかつて希望した舞台の制作に取り組むことができたのだ。第1幕は編集長のインタビュー形式でそんなことを書いた。

第2幕

そして、第2幕が、2020年2月発行の『文芸』24号だった。今度は、こちらから編集長に頼み込んで書かせてもらったのが、「海ゆかば〜70年目の2つの舞台」だった。



鳥取公演出演者の皆さん(前列中央)和泉元彌さん(その右)紺野美沙子さん(左端)筆者

その鳥取市で上演した舞台に、諺に言うところの「お芝居の神さまが舞い降りて」来てくれたのだ。キャバ 2000 の大ホールはほぼ満席。その熱気に押されて、和泉元彌さん主演の役者陣と観客が一体となり感動的な舞台となった。流れる涙を拭おうともせず舞台を見ている人を目撃してしまったのだ。こうして演劇の門外漢が、お芝居の醍醐味を初体験したのである。

その公演のちょうど 1 か月前、私はある別の舞台に招かれ、ある市民劇を見ていた。沖縄戦の悲劇を舞台化した「ひめゆりの乙女たち」である。これは東京多摩市が毎年実施する平和まつりの一環として地元の教職員 OB が制作する平和劇だった。それに同市在住の先輩の H さんが出演していたことからの観劇だった。H さんは甲府の児童劇団「童連」の 1 期生で、演劇とは無縁の技術者だったことから、私と同じく 70 年目に夢が叶っての舞台出演だった。

ひめゆり学徒隊の乙女たちは隊の指導者で詩人の少尉が作詞し、生徒たちの音楽担当教師が作曲した「^{そうしじゆ}相思樹の歌」を卒業式の「別れの歌」として練習を重ねていた。しかし、軍からストップがかかり卒業歌は「海ゆかば」に差し替えられ、乙女たちは「^{みづ かばね くさむ}水漬く屍、草生す屍」と歌わされた。それから 3 か月後、ひめゆり隊は教師ともに「相思樹の歌」を合唱しながら「草生す屍」となって死んでいったという。「相思樹の歌」は文字通り、生との「別れの歌」になった。こうして、多摩と鳥取の 2 つの舞台は「海ゆかば」で繋がったのである。

鳥取の舞台が終わって 3 週間後思いもよらないことが起こった。お芝居の神さまが万葉の神さまを連れて舞い降りてくれたのだ。そう、万葉集由来の新元号「令和」が発表されたのである。そして、降ってわいたような万葉集ブームが起きる。これまで万葉故地しか興味を示さなかった万葉集が全国区のコンテンツになった。千載一遇の好機到来。それまで絶対無理と思っていた東京公演の絶好のチャンスがやって来た。それまでは単なる夢だったが、夢、幻でなく^{うつ}現となって万葉劇を東京で上演することに決めた。そして憑りつかれたように会場を予約したのである。

それと同じ頃、もう 1 つ朗報が飛び込んできた。H 先輩が制作に協力して、2021 年の多摩平和劇を甲府の「童連」を舞台化して上演するというのである。かくして、2020 年と 21 年に、私にとっては夢の舞台が 2 つ出揃うというのが、第 2 幕の「海ゆかば～70 年目の 2 つの舞台」だった。

第 3 幕

冒頭でもう 1 つ、舞台の諺を紹介するのを忘れていた。「素人が興行に手を出すと大火傷をする」。一番肝心な諺である。

今回は第 3 幕として、いやでも、その「大火傷の場」を書かないわけにはいかない。齢 80 にして東京で初めて舞台の興行にチャレンジすることに腹をくくり、公演日は、2020 年 8 月 14、15 の両日、昼夜 2 部で 4 回公演。15 日は言うまでもなく 75 回目の終戦記念日で、この日軍歌「海ゆかば」の原点を上演することに意義もある。予約した会場は浅草公会堂、キャバは 1080 だから約 3 千人以上の観客を集めなければ赤字になる。

これまでの高岡市や鳥取市での公演はいずれも市或いは市の文化財団等による実行委員会が、会場の手配に始まり、県や国からの助成金、企業の協賛金等による製作費の調達、そして最も大変な広報宣伝活動と集客、券売のすべてをやってきて、私たちは制作委託、つまり舞台の制作だけをやっていた。だが、今回はこれらの全てを自分の手で行う、いわゆる、「自主興行を打つ」ことになったのだ。

そんな素人興行師、最初は順調だったが、慣れぬ興行という難題に取り組み始めると、覚悟はしていたものの思うようにいかない。東京都の演劇部門の助成に申請してみるも、一市民による音楽朗読劇はほとんど相手にされず結果的に3回応募したが3回とも不採択。かつて現役時代に企業協賛の仕事をした経験はあるが、個人レベルのイベントには企業の門戸もほぼ閉ざされていた。浅草の地元台東区役所に何回か通って名義後援はしてくれることになったが、資金的な助成は難しいという。舞台は徐々に暗転していく。

それでも 2019 年の年末が迫ってくると、内容面、特に脚本の詰めと肝心の宣伝はもう始めないと遅いくらいだ。

お芝居の入りは決めた。陸奥の多賀城で亡くなった大伴家持が眠る黄泉の国に「コウ、コウ、コウ」と、魂^{たま}呼びひの聲が響く。その声に千数百年ぶりに甦った家持は自分がかつて詠んだ万葉集中最も北限の歌、黄金山の上空に飛び出し、大震災の爪痕が残る陸奥の海岸沿いを南方に空中浮遊する。眼下に広がる荒涼たる光景。と、その時、ある不穏な感触が皮膚を刺し身体の中を突き抜けていった。福島上空だ。

魂呼びひの声に導かれてさらに南下すると、遠方に見えた光の点が一気に広がり広大な光の海になった。その瞬間光の束に目がくらみ気がついた時には、天にも届かんばかりの巨大な火の見櫓に激突しそうになり、地上に墜ちる。しばらくして目を覚ますと、そこは大きなお寺だった。武蔵の国は浅草の浅草寺だ。激突しそうになった巨大な火の見櫓は武蔵国の「天上の樹」、何やら、「トウキョウ・スカイツリー」と聞いたが、それは後の話。

浅草寺……その歴史をたどると万葉の時代にさかのぼる。

万葉集の 2 番歌は舒明天皇の「国見の歌」だが、大和の国でこの歌が詠われた頃、武蔵の国宮戸川（現在の隅田川）で漁師の網にかかった聖観音像が祀られ供養されたのが浅草寺の始まりとされている。ともに 1400 年近い歴史を持つ。

そのすぐ隣が浅草公会堂だった。そこで、新たに、「歴史ある演芸のふるさと浅草に、異種、異才、異色の音楽朗読劇『YAKAMUCHI』がやってくる」をキャッチフレーズに公演予告のチラシ 2000 枚を印刷して関係方面に配り始めた。同時に友人や仲間には先行予約の受付を始めた。

年が明けて 2 月になって夢の公演が半年後に迫ると、夢は夢でもウトウトしたと思ったら、「客席がガラガラ」という悪夢にうなされる。

まあ、個人レベルのイベントには公的助成や企業協賛が難しいことは見越していたので、個人ルートでも協

力を依頼していた。

幸い面白がって支援してくれそうな人が現れ、「なんとかいいスタートが切れそうだ」と思った、まさにそんな矢先とんでもないメールが飛び込んできた。パートナーのプロデューサーから「自爆テロと思われるかもしれないが……降板したい」、つまり、「プロデューサーの仕事から降りたい」という訣別の通告だった。寝耳に水のこどだった。公演を半年後に控え、文字通り劇的なメールから第 3 幕はスタートを切ったのである。「起承転結」で言えば、予想だにできなかった「転」であり、舞台の神さまは果たしてこの先どのような「結」を書くことになるのだろう。

歴史ある演芸のふるさと浅草で
異種☆異才☆異色の音楽朗読劇

YAKAMOCHI ~ウヤ重げまごと

2020年8月14日(金) 昼の部 14時 / 夜の部 18時30分開演
8月15日(土) 昼の部 14時 / 夜の部 18時30分開演
S席 6,500円 A席 5,000円 **浅草公会堂**

大伴家持	和泉 元彌	坂上郎女	(未定)
大伴旅人	花柳 寿楽	坂上大嬢	下田 麻美
山上憶良	山崎 清介	加藤 記生	戸谷 昌弘
言の精霊	玉川 奈々福	楽の精霊	山本 恭司

製作・脚本 小河原正己 演出 山崎 清介 音楽 山本 恭司
衣装 山口千代子 監修 坂本 信幸(高岡万葉歴史館館長)
制作 新田 美昭 柴田 正 金指 真澄(因幡万葉歴史館館長)
主催 大伴家持生誕1300年記念事業実行委員会(会長 木村 肇)
後援 台東区 NPO日本朗読文化協会 浅草演芸ホール 鳥取県

幻となった東京公演予告チラシ

(続く)